

親からの期待と青年の完全主義傾向との関連

河村, 照美
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/894>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 4, pp.101-110, 2003-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

親からの期待と青年の完全主義傾向との関連

河村 照美 九州大学大学院人間環境学府

The Relation between expectation from the parents and perfectionism tendency of the youth

Terumi Kawamura (Graduate school of human-environment studies, Kyushu university)

In this study, the relation between expectation from the parents and perfectionism tendency which the youth recognized was examined, by including factor of the psychological distance with the parents. First, the scale which measured the degree of the expectation from the parents was made. Next, on boy and each girl, the relation between expectation from the parents and perfectionism tendency which the youth recognized was examined, by including factor of the psychological distance with the parent. As the result, the primary hypothesis that the perfectionism tendency was also high with that the expectation from the parents is high was supported in the which expectation from father and mother. It remained in there being a significant tendency in the girl, when it examined the psychological distance by including. As a whole, the second hypothesis of influencing the relation of the expectation to the perfectionism by the difference between the psychological distance was not supported.

1. 問題と目的

青年期は、これまで一体化していた家族から自分を切り離して、家庭外に関心を移し、自律的な判断や親から独立した行動が可能になる時期である。親の価値観を無批判に取り入れていた児童期を過ぎ、青年は親の考えと自分の考えを照合しつつ、自分なりの生き方を探る必要があるといえよう。

親の価値観の一つの表れとして、「このようにあってほしい」という子への期待がある。少子化が進む現代社会において、尾木(1996)は、「①過剰期待・期待の抽象化②期待の一元化(学力向上・高学歴信仰)③期待の相対化が出来ず親子一体化が進み期待感は変化している」と述べ、さらに、「少子化現象のなかで親子同一性が進行し、受験戦争が結合力をさらに強める」と親子関係について指摘している。そこで、本研究においては、期待を「競争社会の中で、常に上を目指す上昇志向を親が抱くことによる期待」と定義する。また、「親は自分の期待を意識せずに子どもに接している(尾木, 1996)」ことから、本研究では、親の意識に関わらず、子の認知する『親からの期待』を取り扱う。

親の期待に関する研究としては、田中・小川(1981, 1982)が、親の子への職業継承期待が子の職業志向性や職業選択に及ぼす影響を取り扱っている。田中らは、継承群では親の期待が早期に形成され長期にわたって子に影響を及ぼすと推察している。田中らの研究は、期待の一部に焦点を当てたものといえる。

芳澤ら(1986)は、大学付属小学校と他の地域の公立学校の子・親について、社会学的研究を行い、付属小の親のほうがより子に対する進学期待が高く、高度な知的

能力を必要とする職業を期待すること、子どもも自分自身に同様な志望を持つ者が多いことを指摘した。しかしながら、芳澤ら(1986)の研究が小学生対象であることから、青年期における親の期待の具体的内容を測るため、本研究において尺度作成を行うことにしたい。

臨床知見として、Bruch,H(1978)は思春期やせ症の事例に共通してみられる特徴として「子は全生活において家族の期待に添った行動をとりたいと思い、いつも他人に比べて劣らないかと心配し、そのために失敗してがっかりするのを恐れる。この満たされない気持ちが思春期やせ症の核心的問題である」と述べている。内田(1997)不登校の事例研究を通して、「親が子どもを思いのままにしようとする操作的期待が行き詰まりあきらめられるとき、子どもはありのままを受け入れられ家庭での居場所を得る」と考察を行っている。このように臨床現場においても、親の期待は子にとって、大きな問題といえる。

では、親の期待を感じると子はどのような状態になるのだろうか。先のBruch,H(1978)の指摘にもあるように、親の期待するような子ども像を理想の自己ととらえてしまったら、子は自分に完璧であることを課してしまうと考えられる。完全主義者は(1)このようにありたいという理想自己の完全性を追求するだけでなく、(2)このようにあらねばならないという義務自己への違反という不完全性を恐怖し、これを回避しようとする。そして、(3)この二つの完全性の基準に向かって生真面目に強迫的努力を重ねていく、と辻(1992)は指摘し、完全主義尺度において「理想追求の因子」「失敗恐怖因子」「強迫的努力の因子」の3因子を抽出している。また、完全主義傾向は「情緒不安定性」や「勤勉性」などの人格特性

と関係があること、森田神経質や抑鬱神経症の患者は、完全主義得点が普通の大学生よりも有意に高いことを見出した。自分で自分を肯定できず、常に完全を目指そうとする人は不適応感に悩まされると考えられる。そこで、本研究において、親からの期待と完全主義の関連について調べることにしたい。

ところで、先述のように尾木(1996)は「期待の相対化が出来ず親子一体化」を指摘している。もし、親との心理的な距離が離れているならば、親の期待を客観的に捉えるため、親からの期待を高く感じて完全を目指すことは少ないのではないか。金子(1991)は心理的距離の定義を「自己がある他者とのあいだで、どれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で理解し合った関係を持っていると感じているかの度合い」として尺度を作成し、心理的な近さを重視した研究をしている。親との親密度という側面から、心理的距離を測ることは意義があると思われる。

以上のようなことをふまえ、本研究においては、青年が認知する親からの期待と青年の完全主義傾向がどのように関連するかについて、心理的距離の要因も交えながら検討することにしたい。

対象については、青年期中期にあたる年代であり、これまで一体化していた家族から自分を切り離して、家庭外に関心を移し、自律的な判断や親から独立した行動が可能になる、幼児期に次ぐ第二の分離-個体化の時期(馬場 1987)といえる高校生とした。自分の進路について真剣に考える時期、自分とは何者であるかを模索していく時期であることから、対象として適当と思われる。

まとめると、第一の目的は、青年期の認知する親の期待についての尺度を作成することであり、第二の目的は、青年が認知する親からの期待と青年の完全主義傾向がどのように関連するかについて、心理的距離の要因も交えながら検討することである。尚、その考察は、2点の仮説「①親からの期待を高く認知するほど完全主義傾向は高い、②親からの期待が同程度でも、心理的距離の違いによって完全主義傾向が異なる」の検証を中心として行う。

II 予備調査：青年が認知する親からの期待測定尺度の作成

1. 目的

青年が認知する親からの期待測定尺度を作成することを目的とする。

2. 方法

青年が認知する親からの期待測定尺度項目作成のため、大学生18名による自由記述、および芳澤ら(1986)の研究

を参考に親からの期待に関する項目を収集し、41項目にまとめた。次に、収集された41項目を、3名の心理臨床学コースの大学院生が検討し、同じ内容を表す項目や、高校生には不適当と思われる項目を削除したり表現を改めたりした。その結果、33項目が残った。質問紙配布前に、校長および管理職の内容検討を経て、全32項目を親から感じる期待尺度の暫定項目とした。

次に、因子分析に基づく項目の選定を1998年12月上旬に行った。調査対象者は、大学進学率の高い公立普通高校の1年生159名(男子83名、女子76名)、2年生149名(男子74名、女子75名)の計308名(男子157名、女子151名)であった。親から感じる期待尺度の暫定項目とした32項目について、「あなたは、親はどの程度下記の文章のように思っていると感じますか。」と教示し、子どもが感じる親からの期待について4件法で回答を求めた。記入に不備がみられたものを除外した結果、対象者の最終人数は254名(男子131名、女子123名)となった。項目への回答について、「とてもそう思っていると感じる」を4点、「全くそう思っていないと感じる」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。父母それぞれの評定を折半して分析対象とした。

3. 結果

共通性の初期値を1とし、主成分分析を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて5因子解を適当と判断した。このとき5因子による累積説明率は55.19%であった。直交回転後の各項目の因子負荷量をTable 1に示す。Table 1において因子負荷量の絶対値0.40以上を示した項目の内容を参考に各因子を解釈し、第一因子は「進学・学業期待」因子、第二因子は「社会への適応期待」因子、第三因子は「就職期待」因子、第四因子は「従順・見栄期待」因子、第五因子は「苦勞への報い期待」因子と命名した。各因子についてクロンバックの α 係数を求めたところ第一因子=.78、第二因子=.70、第三因子=.74、第四因子=.76、第五因子=.59であった。23項目全体に対しクロンバックの α 係数を算出したところ、.87であった。

これらの結果から、本尺度は、尺度全体においては十分な整合性があることが示され、また尺度内の各因子においては、第五因子の信頼性が若干低いものの、その他四因子において整合性が示された。更なる尺度の洗練が今後の課題である。本研究では、23全項目得点の合計値をもって、親からの期待全体得点とし、また、各因子の項目得点の合計値をもって、親からの期待の各下位尺度得点とした。

Table 1
親から感じる期待尺度因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5	h ²
【進学・学業期待因子】						
05. なるべくなら、偏差値の低い大学には行ってほしくない	.77	-.03	.15	.17	-.06	.64
01. 名の知れた大学へ行ってほしい	.74	.05	.14	.27	.14	.67
04. 大学に行くのは当たり前、少しでもランクの高い大学に行ってほしい	.68	-.01	.17	.19	.25	.60
06. 就職先の選択の幅が広がるようにいい大学に行っておくといい	.54	.27	.31	-.16	-.13	.51
15. 成績上位者リストに載ってくれれば嬉しい	.48	.32	-.23	.26	.17	.48
17. 将来苦勞しないように、今しっかり勉強したほうがよい	.47	.22	.24	.07	.23	.39
29. 試験前は家事の手伝いなどより、まず勉強をしてほしい	.47	.20	.05	.01	.31	.36
【社会への適応期待因子】						
26. 誰にでも好かれる子どもになってほしい	.03	.80	.04	.04	-.02	.64
27. 社会のなかで受け入れられる子になってほしい	.01	.71	.33	.06	-.03	.62
19. 学校やクラスの代表になってほしい	.14	.58	.02	.27	.36	.55
18. 近所の人に子供の出来を褒められると嬉しい	.24	.56	-.10	.33	.13	.51
12. 人の役に立つような職種についてほしい	.01	.55	.31	-.13	.00	.42
【就職期待因子】						
10. 公務員などの安定した職業についてほしい	-.00	.05	.76	.22	.09	.64
13. 景気の波に左右されるような会社には就職してほしくない	.18	.17	.67	.08	.14	.55
03. 国家資格取得と結びつくような学部を選んでほしい	.10	.08	.60	-.28	.06	.46
11. 業績の悪いような会社には就職してほしくない	.21	.15	.60	-.18	.12	.47
【従順・見栄期待因子】						
24. 親の言うとおりにしていれば人生に失敗しないはずだ	.08	-.01	.20	.78	.08	.66
23. 子どもはくちごたえしないで素直に言うことを聞くものだ	.04	.06	.25	.65	-.04	.49
21. よその子どもと比較して自分の子どものほうが優れているほしい	.37	.25	.19	.57	.20	.60
22. 他人に誇れる肩書であってほしい	.24	.35	.28	.54	.17	.59
【苦勞への報い期待因子】						
32. 夜食などを作ってやれば、頑張ってくれれば勉強してくれるはずだ	-.02	.07	.01	.07	.80	.65
31. 子どもが夜遅くまで勉強しているのに合わせて起きていることで、励みになってほしい	.02	-.05	.12	.01	.79	.63
30. 塾や家庭教師にお金をかけているのだから成績は上がるはずだ	.21	.01	.21	.35	.40	.37
固有値	2.98	2.62	2.51	2.38	1.98	
累積説明率 (%)	13.11	24.39	35.61	46.42	55.19	

III. 本調査：親からの期待と青年の完全主義傾向との関連

1. 目的

親からの期待（高／低）が完全主義傾向とどのように関連するかを検討することである。その際、心理的距離の違い（近／中／遠）によって、期待の程度が同じでも完全主義傾向に差があるかどうか合わせて検討した。仮説として、①親からの期待を高く認知するほど完全主義傾向は高い、②親からの期待が同程度でも、心理的距離の違いによって完全主義傾向が異なる、の2点を挙げる。

2. 方法

第一研究で作成した親からの期待尺度および「完全主義尺度（辻，1992）」、「心理的距離尺度（金子，1991）」についての質問紙を施行した。調査対象者・調査時期・調査方法は、予備研究と同一である。

「完全主義尺度（辻，1992）」は、「理想追求の因子」「失敗恐怖因子」「強迫的努力の因子」からなる全14項目の尺度であり、本研究では、「とても当てはまる」～「全く当てはまらない」の4件法で回答を求めた。本研究においては、全体得点を使用した。「心理的距離尺度（金子，1991）」は、1因子構造で全10項目からなる尺度である。父親・母親・親友と対象をかえて比較できる点

に特徴がある。本研究では、この尺度について「とても
そう思う」～「まったくそう思わない」の4件法で回答
を求めた。点数が大きいくほど距離が離れているとされる。
尚、この尺度は女子青年を対象として作られたものであ
るが、本研究で男子における信頼性を検討したところ、

母親・父親どちらも $\alpha=.78$ であり、男子へ適用しても整
合性があるということが示された。

手続きとして、親からの期待と完全主義傾向がどのよ
うに関連しているか、また親との心理的距離の違いによっ
て期待が同程度でも完全主義傾向に違いが見られるかを

Table 2
男子および女子における父母との心理的距離の分散分析結果

	男子		女子	
	母との距離	父との距離	母との距離	父との距離
N	131	131	123	123
心理的距離得点	20.74	22.82	19.28	23.46
SD	4.69	6.19	6.11	7.43

Table 3
男子の完全主義得点（母から感じる期待×母との心理的距離）と分散分析結果

距離	期待L群			期待H群			分散分析		
	近群	中群	遠群	近群	中群	遠群	期待	距離	交互作用
【期待総合】									
N	15	30	23	15	18	30			
完全主義得点	36.27	36.50	34.78	38.47	37.44	37.57	H > L *	n.s	n.s
SD	5.86	5.28	5.46	4.14	4.22	4.37			
【進学・学業期待】									
N	13	28	26	17	20	27			
完全主義得点	36.23	35.68	35.35	38.24	38.50	37.33	H > L *	n.s	n.s
SD	6.25	4.78	5.66	4.02	4.65	4.22			
【社会への適応期待】									
N	13	27	32	17	21	21			
完全主義得点	35.92	36.56	35.18	38.47	37.24	37.19	H > L †	n.s	n.s
SD	4.73	5.29	4.84	5.25	4.40	5.32			
【就職期待】									
N	18	29	28	12	19	25			
完全主義得点	37.11	36.10	35.43	37.75	38.00	37.40	n.s	n.s	n.s
SD	5.91	4.97	5.15	3.82	4.64	4.78			
【見栄・従順期待】									
N	21	27	26	9	21	27			
完全主義得点	36.90	36.41	34.96	38.44	37.43	37.70	H > L †	n.s	n.s
SD	5.69	5.54	5.70	3.43	3.93	3.94			
【苦勞への報い期待】									
N	17	25	25	13	23	28			
完全主義得点	37.18	36.76	35.00	37.62	36.96	37.57	n.s	n.s	n.s
SD	5.76	5.09	5.62	4.33	4.75	4.18			

() は標準偏差 *** p<.001 ** p<.01 * p<.05 † p<.10

検討するため、完全主義尺度全体得点を従属変数とし、親からの期待得点の平均点で分けた2群（高群／低群）および親との心理的距離得点で分けた3群（近群／中群／遠群）を独立変数とする2要因の分散分析を父母それぞれについて男女別に行った。親からの期待については、総合点および各因子得点について検討を行った。

3. 結果

仮説検証に先立ち、現代高校生の親からの期待における性差、完全主義傾向における性差、親との心理的距離における性差を検討した。

(1) 現代高校生の親からの期待における性差

母親からの期待について、総合点及び各因子得点の性差を検討したところ、「就職期待」において女子の平

均得点が男子の平均得点よりも有意に高かった ($t(252)=2.26, p<.05$)。その他の因子及び総合点においては、男女の差は有意ではなかった。

父親からの期待においても、母親から感じる期待と同様に、第3因子の就職期待のみ女子の平均得点が男子の平均得点よりも有意に高く ($t(252)=2.28, p<.05$)、総合点及び第3因子を除く他の因子得点には性差は見られなかった。

(2) 現代高校生の完全主義傾向における性差

男子の平均得点が36.77 (SD=4.97)、女子の平均得点が35.08 (SD=5.63)であり、男子の方が女子よりも完全主義傾向が有意に高かった ($t(252)=2.54, p<.05$)。

(3) 現代高校生の親との心理的距離における性差

男子および女子における父母との心理的距離の平均値

Table 4
男子の完全主義得点（父から感じる期待×父との心理的距離）と分散分析結果

距離	期待L群			期待H群			分散分析		
	近群	中群	遠群	近群	中群	遠群	期待	距離	交互作用
【期待総合】									
N	28	26	13	17	24	23			
完全主義得点	36.62	35.42	35	36.47	39.17	37.17	H > L *	n.s	n.s
SD	6.2	4.12	6.22	4.49	3.43	4.58			
【進学・学業期待】									
N	24	21	18	21	29	18			
完全主義得点	34.22	33.11	34.56	36.68	35.57	36	H > L **	n.s	n.s
SD	4.78	4.34	6.22	5.98	3.4	4.23			
【社会への適応期待】									
N	22	29	22	23	21	14			
完全主義得点	34.82	36.21	36.32	38.26	38.61	36.5	H > L *	n.s	n.s
SD	5.32	4.39	5.07	5.37	3.6	5.72			
【就職期待】									
N	29	29	18	16	21	18			
完全主義得点	36.59	35.59	35.44	36.56	39.47	37.33	H > L *	n.s	n.s
SD	6.01	3.69	5.09	4.83	3.91	5.38			
【見栄・従順期待】									
N	33	28	10	12	22	26			
完全主義得点	36.09	35.57	35.4	37.92	39.32	36.77	H > L *	n.s	n.s
SD	6.07	4.18	5.64	3.73	3.27	5.16			
【苦勞への報い期待】									
N	19	19	14	26	31	22			
完全主義得点	35.42	37.21	34.12	37.42	37.22	37.82	H > L *	n.s	n.s
SD	6.65	4.44	5.49	4.56	4.15	4.67			

() は標準偏差 *** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$

を求めたところ、有意差が見られた ($F(3,504)=12.11$, $p<.001$) (Table 2)。テューキーの不均等 nHSD 検定を行ったところ、男子の父との距離 > 男子の母との距離 ($p<.05$), 女子の父との距離 > 男子の母との距離 ($p<.01$), 男子の父との距離 > 女子の母との距離 ($p<.001$), 女子の父との距離 > 女子の母との距離 ($p<.001$) であった。

(4) 男子における完全主義傾向と、母からの期待・母との心理的距離との関連

Table 3 に男子の完全主義得点 (母からの期待×母との距離) を示す。

母からの期待総合および母からの「進学・学業期待」について、期待の主効果が有意であった (期待総合: $F(1,125)=4.82$, $p<.05$, 「進学・学業期待」: $F(1,125)=6.47$, $p<.05$)。期待高群と低群を比べると、高群の方が

低群よりも完全主義得点の平均が高かった。

母からの「社会への適応期待」および母からの「見栄・従順期待」については、期待の主効果が有意傾向を示すにとどまった (「社会への適応期待」: $F(1,125)=2.85$, $p<.10$, 「見栄・従順期待」: $F(1,125)=3.60$, $p<.10$)。

母からの「就職期待」および「苦勞への報い期待」については、期待の主効果、距離の主効果、交互作用全て有意でなかった。

(5) 男子における完全主義傾向と、父からの期待・父との心理的距離との関連

Table 4 に男子の完全主義得点 (父からの期待×父との距離) を示す。

父からの期待総合および全ての下位尺度において、期待の主効果が有意であった (期待総合: $F(1,125)=$

Table 5
女子の完全主義得点 (母から感じる期待×母との心理的距離) と分散分析結果

距離	期待L群			期待H群			分散分析		
	近群	中群	遠群	近群	中群	遠群	期待	距離	交互作用
【期待総合】									
N	26	20	11	24	20	22			
完全主義得点	32.46	34.30	32.09	39.00	35.90	35.36	H > L***	n.s	†
SD	4.55	6.07	3.81	5.06	4.34	6.50			
【進学・学業期待】									
N	30	18	18	20	22	15			
完全主義得点	33.23	34.55	32.83	39.15	35.54	36.00	H > L***	n.s	n.s
SD	4.90	5.09	3.57	5.24	5.50	7.62			
【社会への適応期待】									
N	20	23	17	30	17	16			
完全主義得点	33.05	34.48	31.70	37.30	35.94	37.00	H > L***	n.s	n.s
SD	5.74	5.11	4.51	5.24	5.54	6.08			
【就職期待】									
N	26	19	11	24	21	22			
完全主義得点	33.34	34.84	32.73	38.04	35.33	35.05	H > L *	n.s	n.s
SD	5.37	5.89	3.52	5.29	4.79	6.72			
【見栄・従順期待】									
N	32	20	22	18	20	22			
完全主義得点	33.16	33.90	31.64	39.94	36.30	35.59	H > L**	†	n.s
SD	4.97	5.74	3.85	4.50	4.60	6.35			
【苦勞への報い期待】									
N	31	19	19	19	21	14			
完全主義得点	33.68	35.21	33.10	38.74	35.00	35.86	H > L *	n.s	†
SD	5.09	6.58	4.69	5.59	3.91	7.09			

() は標準偏差 *** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$

4.69, $p < .05$, 「進学・学業期待」: $F(1,125)=8.79$, $p < .01$, 「社会への適応期待」: $F(1,125)=5.29$, $p < .05$, 「就職期待」: $F(1,125)=4.79$, $p < .05$, 「見栄・従順期待」: $F(1,125)=6.06$, $p < .05$, 「苦勞への報い期待」: $F(1,125)=4.55$, $p < .05$ 。期待高群と低群を比べると, 期待高群の方が低群よりも完全主義得点の平均が高かった。

(6) 女子における完全主義傾向と, 母からの期待・母との心理的距離との関連

Table 5 に女子の完全主義得点 (母からの期待×母との距離) を示す。

母からの期待総合および全ての下位尺度において, 期待の主効果が有意であった (期待総合: $F(1,117)=15.05$, $p < .001$, 「進学・学業期待」: $F(1,117)=11.65$, $p < .001$, 「社会への適応期待」: $F(1,117)=13.71$, $p < .001$,

「就職期待」 $F(1,117)=5.91$, $p < .05$, 「見栄・従順期待」: $F(1,117)=19.96$, $p < .001$, 「苦勞への報い期待」: $F(1,117)=6.29$, $p < .05$)。期待高群と低群を比べると, 期待高群の方が低群よりも完全主義得点の平均が高かった。期待総合および「苦勞への報い期待」において, 期待×距離の交互作用は, 有意傾向を示すにとどまった (期待総合: $F(2,117)=2.59$, $p < .10$, 「苦勞への報い期待」: $F(2,117)=2.53$, $p < .10$)。

(7) 女子における完全主義傾向と, 父からの期待・父との心理的距離との関連

Table 6 に女子の完全主義得点 (父からの期待×父との距離) を示す。

父からの期待総合, および「就職期待」を除く全ての下位尺度において, 期待の主効果が有意であった (期

Table 6
女子の完全主義得点 (父から感じる期待×父との心理的距離) と分散分析結果

距離	期待L群			期待H群			分散分析		
	近群	中群	遠群	近群	中群	遠群	期待	距離	交互作用
【期待総合】									
N	27	15	19	19	16	27			
完全主義得点	34.15	32.67	34.05	36.79	35.69	36.52	H > L **	n.s	n.s
SD	6.67	3.42	4.89	6.87	5.11	4.93			
【進学・学業期待】									
N	27	17	16	19	14	30			
完全主義得点	34.22	33.11	34.56	36.68	35.57	36	H > L *	n.s	n.s
SD	7.1	2.98	5.09	6.26	5.8	4.98			
【社会への適応期待】									
N	24	18	24	22	13	22			
完全主義得点	33.13	33.28	34	37.55	35.54	37.14	H > L **	n.s	n.s
SD	6.92	3.01	5.22	6.01	6.01	4.31			
【就職期待】									
N	26	11	19	20	20	27			
完全主義得点	33.92	34.18	35.47	36.95	34.25	35.52	n.s	n.s	n.s
SD	6.67	5.51	4.9	6.94	4.12	5.18			
【見栄・従順期待】									
N	33	12	15	13	19	31			
完全主義得点	33.63	32.17	33.93	39.31	35.53	36.26	H > L***	n.s	n.s
SD	5.62	3.64	4.64	8.02	4.69	5.08			
【苦勞への報い期待】									
N	27	17	25	19	14	21			
完全主義得点	33.85	34.29	34.12	37.21	34.14	37.14	H > L *	n.s	n.s
SD	6.77	5	4.94	6.53	4.17	4.69			

() は標準偏差 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

待総合：F(1,117)=6.92, $p<.01$, 「進学・学業期待」：F(1,117)=4.04, $p<.05$, 「社会への適応期待」：F(1,117)=10.62, $p<.01$, 「見栄・従順期待」：F(1,117)=12.96, $p<.001$, 「苦勞への報い期待」：F(1,117)=4.09, $p<.05$ 。期待高群と低群を比べると、期待高群の方が低群よりも完全主義得点の平均が高かった。

上述のことから親からの期待を高く感じると完全主義傾向も高いという第一の仮説は、全体として支持された。特に、男子においては父、女子においては母というように、性別が同じ親からの期待は全て完全主義傾向に関連していた。

心理的距離を交えて検討したところ、有意傾向が見られるにとどまった。全体として心理的距離の違いによって期待の完全主義への関連が左右されるということは支持されなかった。

4. 考察

(1) 現代高校生の親からの期待における性差

進学校に通う高校生女子は、男子生徒に比べ、父母からの就職期待を高く認知していることが示された。進学校に進んだ女子は、親から見ると、それまでの学校社会のなかで男子と互角あるいはそれ以上の成果を修めてきたといえる。そのような娘が実社会に出ても男性と同等のキャリアを持つことを父母は願っている可能性がある。また、娘自身、自分が社会のなかで男性と互角にやっていくことを望み、それができると考えているのかもしれない。そのような姿勢が父母からの就職期待に対する感受性を高めているということも考えられる。他に、現在不況に喘ぐ日本社会の女子学生の就職率の低さも、女子が感じる期待が男子よりも強いことに関係しているのかもしれない。新聞やテレビで女子学生の就職率の低さが報じられるたび、親は将来の娘の就職状況について意識化させられたり、娘と就職について語ろうとしたりするのではないか。そのため、男子よりも女子の方が、親からの就職期待を感じる機会が多くなるということが考えられる。

(2) 現代高校生の完全主義傾向における性差

男子の方が女子よりも完全主義傾向が有意に高いことが示された。女子の方が成功恐怖が高いことがこれまでいわれており、男子の方が女子よりも自らの完全主義傾向を認めやすかったと考えられる。

(3) 現代高校生の親との心理的距離における性差

男子および女子における父母との心理的距離の平均値を求めたところ、男子の父との心理的距離が男子の母との心理的距離よりも有意に遠いこと、女子の父との心理的距離が男子の母との心理的距離よりも有意に遠いこと、男子の父との心理的距離が女子の母との心理的距離よりも有意に遠いこと、女子の父との心理的距離が女子の母

との心理的距離よりも有意に遠いことが分かった。金子(1991)においても、女子高校生の父親との心理的距離が、母親よりも遠いことが示されており、本調査でも同様の結果が示されたといえる。

(4) 男子における完全主義傾向と、親からの期待・親との心理的距離との関連

男子では、母からの期待について、総合および「進学・学業期待」において、期待を高く感じる群が低い群よりも完全主義得点が高いことが示された。その他の下位尺度において、期待の高さと完全主義傾向との関連は見られなかった。男子において母との心理的距離は父との心理的距離よりも近く、日常的接触も多いと考えられる。そのため、学業・進学という高校生にとって身近な期待を感じ取ることが多いのであろう。

父からの期待について、期待総合および全ての下位尺度において、期待を高く感じる群が低い群よりも完全主義得点が高いことが示された。男子は父との心理的距離が離れているにもかかわらず、父からの期待と完全主義傾向が高いということから、男子の父親の期待に対する感受性が窺える。

上記より、親から感じる期待が高いと完全主義傾向も高いという第一の仮説は、支持された。親の持つ“理想の子ども像”を敏感に感じとる子どもは、その理想を追求しようと完全主義的になるのであろう。特に、同じ性別の親からの期待は全て完全主義傾向に関連していることは特筆すべき点である。しかしながら、心理的距離の要因について関連は見られず、第二の仮説は支持されなかった。

(5) 女子における完全主義傾向と、親からの期待・親との心理的距離との関連

母親からの期待について、期待総合および全ての下位尺度において、期待を高く認知する群の方が低く認知する群よりも完全主義得点が高いことが示された。女子の母との心理的距離が近いこと、母からの期待を高く感じると、その期待に応えようと完全主義的になるのだといえる。期待を高く認知し、母との距離が近い群は他の群よりも完全主義傾向が高い傾向はあり、心理的距離の違いによって期待の完全主義への関連が左右されるという可能性は示唆される。

父親からの期待については、総合および第3因子を除く各因子において、父親から感じる期待が高い群が低い群よりも、完全主義得点が高いということが分かった。このことから、親から感じる期待が高いと完全主義傾向も高いという第一の仮説は父親においても支持されたといえる。就職期待については、期待と完全主義に関連が見られなかったことについては、女子と父親との心理的距離が離れていること、女子と父親は性別が異なるため、職業的な見通しにおける同一視が起こりにくいことが要

因として考えられる。また、父が母よりも不況や現在の経済情勢に敏感で、上昇志向的な期待というよりもむしろ現実的な期待をしていることが推察され、そのため、子どもも「そのような期待は実現可能だ」と感じ、それほど完璧主義的になることがないことが示唆される。

IV. まとめと今後の展望

本研究においては、青年が感じる親からの期待と青年の完全主義傾向がどのように関連するかについて、心理的距離の要因も交えながら検討を行うことを目的とした。

まず、親からの期待を測る尺度を作成した。この尺度は母親父親それぞれに用いることが出来るものである。一部の低位尺度の信頼性が低かったことから、尺度の洗練が今後の課題として挙げられる。

次に、男女それぞれについて、親からの期待と完全主義との関連を、親との心理的距離の要因も交えて検討した。その結果、まず親からの期待が高いと完全主義傾向も高いという第一の仮説は、母親からの期待・父親からの期待どちらにおいても支持された。しかしながら、完全主義傾向が高いが故に期待を高く認知しているということも考えられるため、今後さらに、親が実際どの程度期待しているのか、子が認知する期待の程度の差についても検討していきたい。

心理的距離を交えて検討したところ、女子において有意傾向が見られるにとどまった。全体として心理的距離の違いによって期待の完全主義への関連が左右されるということは支持されなかった。これは、金子（1991）の心理的距離尺度が親との情緒的な結びつきを考慮に入れて作成されていることが一つの要因として考えられる。“私は母（父）と気が合う”“私は母（父）と一緒にいると心が休まる”等という項目が距離の近さを表すのに対し、“母（父）に対して反発したくなる”“私と母（父）はあいられないところがある”等という項目が距離の遠さを表している。つまり、親への反発を感じるような人が今回の研究では心理的距離が遠い群として扱われたのだが、落合（1998）が「親が子を抱え込む関係と手を切る関係は心理的離乳の第一段階」と位置づけていることに対応するように、子どもから見て、親と情緒的に結びついた関係とその反対の関係（反発など）は、親との距離が取れていないことを表すとも考えられる。落合・佐藤（1996）において、「中学生の『親が自分を抱え込もうとしている親子関係』『危険から親によって守られている親子関係』を生きていると思っている状態から、大学生の『自分は親から承認され、頼りにされている』と思う状態へと変化していくこと」、「その大きな転換期は高校生から大学生の間に起こっていること」が示されており、本研究の対象となった高校生は親との関係の転

換の直中にいるために心理的距離の要因が関係しなかったとも考えられる。今後、青年期中期のみならず前期・後期へ対象を広げ、親からの期待と完全主義との関連を、親との心理的距離の要因も交えて検討していきたい。

最後に、本調査で得られた自由記述による感想について触れる。親についての質問については、「このアンケートのおかげで親と自分とを客観的に見つめることが出来た」という肯定的な感想が多く見られたが、「親について考えたくない」という拒否的な反応も少数ながら見られた。親からの期待や親との距離についての考えることが、自己理解や親に対する理解を促進する可能性について検討するとともに、親や自分のあり方を見つめることに苦痛を感じる人達についての配慮、拒否的反応に隠された問題についても今後検討していく必要があると思われる。

【付記】

本論文は日本青年心理学会第7回大会において発表した「親からの期待と青年の完全主義傾向との関連」を加筆修正したものである。座長の労をお取りいただきました山梨学院大学五味義夫教授ならびに貴重なご示唆を頂きましたフロアの皆様、本論文作成にあたり、ご指導いただきました九州大学大学院人間環境学研究院教授野島一彦先生、同助教授高橋靖恵先生に深謝いたします。質問紙調査にご協力下さった先生ならびに生徒の皆様には心から感謝申し上げます。

文 献

- 馬場謙一 1987 青年期の深層 有斐閣
 Boskind-White, M. & White Jr, W.C. 1987 2nd ed. 杵渕幸子・森川那智子・細田真司・久田みさ子訳 1991 過食と女性の心理 星和書店
 Bruch, H. 1978 岡部祥平・溝口純二訳 1979 思春期やせ症の謎—ゴールデンページ— 星和書店
 金子俊子 1991 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
 落合良行 1988 青年の友情と孤独 西平直喜・久世敏雄編 青年心理学ハンドブック福村出版 p.16-534.
 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化から見た心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44(1), 11-22.
 尾木直樹 1996 親の過剰期待と空転する子どもの努力 児童心理 50, 75-80.
 田中宏二・小川一夫 1981 親の期待と親への同一視が看護職の継承に及ぼす影響 教育心理学研究, 29, 166-170.
 田中宏二・小川一夫 1982 教師職選択に及ぼす親の影

- 響 教育心理学研究, 30(3), 257-262.
- 辻平治郎 1992 完全主義の構造とその測定尺度の作成
甲南女子大学人間科学年報, 17, 1-14.
- 内田利弘 1997 「自分」と家族 北山修(編)「自分」と「自分がない」 星和書店 Pp.91-104.
- 芳澤毅・島袋恒男・島袋哲1986 進学期待と職業期待に関する研究—琉球大付属小と他地域との比較 琉球大学法文学部紀要 社会学編, 28, 77-131.